



じんぼう・みか
法政大学卒業後、文具メーカー勤務を経て業界誌記者となり、1993年独立。取材記事、コラムなど連載。近著「パチンコ年代記」(バジリコ、07年)

志村けんさんの訃報に思う

たった、1か月。前回執筆時からたった1か月で、日本の新型コロナウイルス感染者数の累計が、10倍になってしましました。そして私の周囲においても、上野へ取材に行ったとき前を通っていた総合病院が集団感染を起こしてしまったり、メーカーや販社関係者の感染発表、そして緊急事態宣言後は通っていたホールも次々休業するなど、劇的な変化が次から次へと訪れています。もはや事態は刻々と変化し続けており、GW明けに今号をお届けした時点では日本や私自身もどうなっているか分からぬいため（少しでも良い方向に動いていればいいのですが…）、今回は3月に起こった衝撃的な事件と、それに関連したパチンコについて書いておきたいと思います。

3月29日、新型コロナウイルス感染によってコメディアンの志村けんさんが亡くなりました。ついこの前まで元気にTV出演していたにもかかわらず、入院や陽性が報じられてから1週間足らずで急逝してしまったニュースは、国民の間に衝撃を伴って大きく報じされました。また、陽性患者のため遺族がお見舞いも看取りもできないまま火葬されてしまったことも、改めてこの病気の恐ろしさを伝えてくれたと思います。

志村けんさんといえば、ご存知の通り1970年代からザ・ドリフターズの一員として大活躍。私も夢中で番組を見ており、当時はまだ家にビデオデッキがなかったため、TVで歌う東村山音頭などをカセットテープに吹き込んでいたりしま



筆者の思い出が詰まった「フィーバーしむけん」
(写真はCR版)

した。その後もソロとして「バカ殿様」「変なおじさん」といったコミカルなキャラクターを生み出し、それらがパチンコになって誕生したのが、2000年にSANKYOから発表された『フィーバーしむけん』シリーズでした。

志村さんの魅力がタップリと詰まったこの機種には、「変なおじさん」「ひとみばあさん」「バカ殿様」「ケン坊」といった、TVでおなじみのキャラが勢揃い。当時はまだ派手な役物などありませんでしたが、逆に画面の演出に集中できたせいか、今でもリーチや予告の法則といった中身を次々と思い出すことができます。また、当時私はメールマガジン作成の仕事も請け負っており、そこで書く実戦記事にも、この機種は大いに役立ってくれました。

そういうこともあって、あまりにも毎日のように打っていたので、初めて席の後ろに店員さんに「張り付かれた」機種であったことも思い出しました（現金機タイプで、少しでも損をしないよう時短中に開く電動チューリップにタイミングを合わせて打っていたので、挙動が怪しかったのかもしれません…）。振り返ると、志村さんは私の人生や生活においてもすごく身近な存在だったのだ…と、悲しい気持ちになりますが、訃報で改めて沢山の事柄が涌き上がって来たのです。

そして今、緊急事態宣言が全国へ拡大した中、自粛要請をかいぐって営業継続するホールや越境してまで打ちに来るファンが、メディアで連日報道されています。パチンコは確かに楽しい娯楽ではありますが、亡くなった志村さんが奔放に笑いを集めていたのも健康で自由だったからこそ。少しの間足並みを揃えてギュッと引き締めることで、一日も早く日常を取り戻そうとする自浄的な動きが、業界内部からもっと涌き上がって来ますように。そして次号においても私そして皆さまが、健康でお会いできることを心からお祈りしています。